

お盆の迎え方、精霊棚の飾り方

はじめに

お盆は、長年に渡り各家庭で毎年行われており、日本人の風物詩としてこれほど生活に密着した仏教行事はないでしょう。しかし、一方で地域差や各家庭によって様々な形式が見られるのです。それは、長年に渡る幾多の変遷があったからです。そのような中で、お盆の行事に関して、お寺によく質問されることを列記してみたいと思います。

1、七月盆と八月盆

最初に、お盆を「七月盆」で行うのか「八月盆」で行うのかという質問です。これは、まずお盆の由来の時期を知らなければなりません。お盆の起源の一つは、インドの仏教教団が、雨期に集団で修行を行なった際、その終わりの日に阿難尊者が亡き母のために修行中の僧侶の供養を行ったのが、その始まりといわれています。これは、安居（あんご）とよばれる集団修行の最後の日、つまり太陰暦の7月15日でした。

仏教が日本に伝わり、お盆は日本古来から伝わる祖霊信仰と結びつき、盛んに行われるようになりました。

旧暦（太陰暦）の7月15日は、新暦（太陽暦）では約1ヶ月のずれがあります。農家の方にとっては、田の仕事が一段落する農閑期にあたる8月盆のほうが都合が良いので、新暦への移行とともに8月盆が一般化しました。

また、都市部では、旧暦の7月をそのまま新暦で読み替えた「7月盆」を行い、夏休みの取れる8月には田舎で「8月盆」を迎える方も増えてきました。

貞昌院の近辺（横浜市港南区）では、おおよそ4割が7月盆、6割が8月盆という割合です。

■七月盆 = 7月13～15日

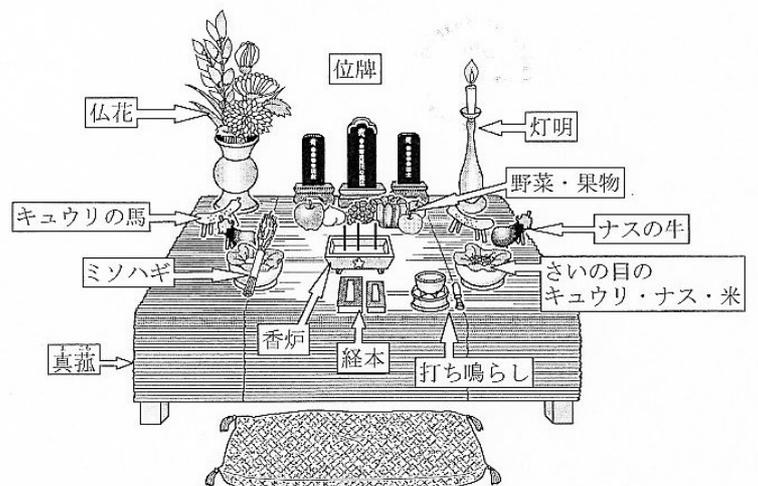
■八月盆 = 8月13～15日

2、お盆棚のまつり方

御先祖様を迎えるために御盆棚（精霊棚＝しょうりようだな）を設けます。

各家庭に準備する物は、古くは、縁側に机を出して、ゴザ等を掛け、竹を正面に立てたりしましたが、縁側の無い家庭も増えましたので、部屋の隅、または仏壇の脇などに作る方もいます。また、仏壇の前に小さな、机を出して祀ったり、仏壇をそのまま利用する場合があります。

それぞれの家庭の事情もありますので、必ずこうしなければならない、ということはありません。要は、御先祖様を迎える気持ちと、そのための準備をしっかりに行なう事が中心なのであり、その形式に引きずられる心配は無用です。



▲精霊棚の飾り方の一例。

3、迎え火

迎え火の焚き方に付いてです。

時期は、13日の日暮れというのが一般的です。門前において麻幹（おがら）を焚きます。また、墓前で焚いたり、墓地まで提灯を持って迎えに行く地方もあります。これは、御先祖様が帰ってくる道を間違えないようにと言う意味で焚きます。

さて、最近では団地やマンション住まいで迎え火が焚けない、という話を聞きます。火災の危険が有りますので、無理には申しませんが、豆電球の提灯を掲げるとか、焙烙（ほうろく）や素焼きの鉢等を用意してその中に少量の麻幹で灯火を作り、迎える気持ちを表してみたいはいかがでしょうか。

4、送り火

次に送り火についてです。

この時期に関しては、地域差が大きいです。神奈川県周辺では、15日の夕方、という風習が多いようです。また、京都の大文字焼きに代表されるように16日の夜という地方も多いですし、15日の深夜という場合もあります。このように送り火の時期に関しては様々ですので、その御家庭の伝統を重視するのがよいでしょう。

また、迎え火と同様に門前で麻幹を焚きますが、送り提灯と言って、墓地まで御盆棚に掲げた提灯や灯籠をお供えに行く地域もあります。さらに、灯籠流し（精霊流し）も送り火の一種です。

5、お供え物

お供え物で代表的なのが、ナスの牛とキュウリの馬でしょう。これは、御先祖様の乗り物として、迎え火の時に門前に用意し、焚いた後で御盆棚まで持ってきます。さらに送り火の時に門前に出します。

その他、灯明に模したホオズキを供えたり、季節の野菜・果物等をお供えします。

この様な物を供えなければならないという決まりは特にありません。仏様の喜ぶ物、好きだった物をお供えし、その感謝の気持ちを表しましょう。

最後に

お盆の諸行事に関する様々を述べてみました。しかし、地域や御家庭、寺院によって様々な考え方や風習があります。分からないことは、お寺に気軽に御相談下さい。また、その家や地域の伝統やしきたりも大事にして頂ければと思います。

貞昌院では初盆を迎えられる方につきまして、お盆期間中に、檀家様の仏壇にお詣りさせていただいております。
もちろん、初盆以外の方につきましても、ご希望があれば詣りさせていただきます。時間調整の都合もありますので、2週間くらい前までに貞昌院までご連絡くださいますようお願いいたします。